

第13回インフラツーリズム有識者懇談会

令和6年3月11日

【アセットマネジメント企画調整官】 第13回インフラツーリズム有識者懇談会を開催いたします。懇談会の開催に当たりまして、総合政策局公共事業企画調整課長より一言御挨拶を申し上げます。

【公共事業企画調整課長】 お忙しい中、インフラツーリズム有識者懇談会に御参加いただきまして、心から御礼を申し上げます。

本日、ちょうど東日本大震災から13年になります。改めて亡くなられた方に心からを哀悼の意を表したいと思えます。また、今年の元旦に発生した能登半島地震では、多くの方が亡くなられ、いまだに多くの方が避難生活を送られており、改めて亡くなられた方に哀悼の意を表すとともに、被災された皆様方に心よりお見舞いを申し上げます。

このインフラツーリズムの目的の一つは、インフラの役割や重要性をお伝えするということにございます。国民の皆様インフラ整備について御理解をいただき、非常時等でもその生活を守り支えるために、この取組を改めて進めたいと思っております。

今回の懇談会では、まず既存のモデル地区の取組状況を報告させていただき、次の候補について御議論いただければと思います。

また、直轄の施設以外での取組やメディアの露出も増えてきており、インフラツーリズムのさらなる展開について忌憚のない御意見をいただきたいと思えます。本日はよろしくお願ひ申し上げます。

【アセットマネジメント企画調整官】 続きまして、本日御出席いただいております本懇談会の委員の方々を御紹介いたします。清水哲夫座長でございます。

【清水座長】 よろしくお願ひします。

【アセットマネジメント企画調整官】 阿部貴弘委員でございます。

【阿部委員】 よろしくお願ひします。

【アセットマネジメント企画調整官】 河野まゆ子委員でございます。

【河野委員】 よろしくお願ひします。

【アセットマネジメント企画調整官】 篠原靖委員でございます。

【篠原委員】 よろしくお願ひいたします。

【アセットマネジメント企画調整官】 清水座長から一言御挨拶をいただきたいと思ひます。

【清水座長】 皆さん、おはようございます。本日は3.11ですが、私は現在金沢大学にも携わっており、能登半島地震でインフラがかなり被災するなど改めてインフラの大事さを伝えるものであったと思ひます。

今、各地でインフラツーリズムの取組が増えておりますが、本筋のインフラの大事さをどう観光と絡めて伝えていくか、もう1回考える時期かと思ひますが、「取りあえずやってみる」という時期はもう脱さないといけないと思ひます。手引きも改訂しましたが、実際どのように運用していくか、我々一同で知恵を絞る必要があると思ひます。

偶然、先週末にあるゼネコンから、会社としても専用課を作り、インフラツーリズムをやりたいが、どうやったらいいかと相談されました。建設後の取組を建設会社の方が検討されておりました。そういう時代だと改めて思ひましたし、このインフラツーリズムが単なる試行を超えて、どうやって実になっていくか大事な時期に差しかかっているということ象徴することでしたので、お話をさせていただきました。

今日も活発な議論を期待しております。よろしくお願ひします。

【アセットマネジメント企画調整官】 清水座長、ありがとうございました。

それでは、議事に移ります。以降の進行は清水座長にお願ひ致します。

【清水座長】 今日はモデル地区の取組状況と、インフラツーリズムのさらなる拡大に向けて、新規モデル地区の選定についてメインで議論いただく予定となります。

最初、モデル地区の取組状況のうち、令和元年度及び令和2年度に選定された既存のモデル地区について、事務局から御説明よろしくお願ひします。

【アセットマネジメント企画調整官】 モデル地区につきまして説明いたします。

まず、天ヶ瀬ダム、鶴田ダム、新日下川放水路でございます。

天ヶ瀬ダムは、今年の1月に宇治川・天ヶ瀬ダム活性化協議会が発足し、実施主体の中心である宇治市観光協会がツアーの企画・運営・ガイドの確保を担っております。協議会ができる前までは、天ヶ瀬ダムを観光資源に含めた宇治市域の観光発展検討会がございましたが、こちらがさらに協議会に発展したものです。

戦略策定としては、かわまちづくりという河川を含めたまちづくりの計画と併せて、宇

治川流域の河川空間を活用したモデルへ変容する予定です。

また、事業基盤の構築としては、河川空間のオープン化に向けて、かわまちづくり推進会議構成者や地域の商工会議所を交えた新たな協議会が発足しました。

販路については、宇治市観光協会が中心となり、旅行会社向けの販売等を行っています。

ターゲットと戦略を6ページ目左下に図で示しております。国内の修学旅行や宇治市及び近隣の教育旅行を対象とし、天ヶ瀬ダムを活用した単品の見学コンテンツを有料化して修学旅行の一つの組合せとして入れていただくほか、近隣の教育旅行でも活用しております。加えて、天ヶ瀬ダムと周辺施設、例えば下水道施設などを社会科見学コンテンツとして準備しております。

オープン化後の取組のイメージとしては、宇治市も入りながら、宇治市観光協会が事業主体となって販売や受付を行い、教育旅行を中心とした持続的なインフラツーリズムを進めていく予定です。

7ページ目、提供商品の造成としてガイドマニュアルを作成し、ガイドの品質を均質化しております。また、有料見学会として、販売単価を定め教育旅行も含めて有料で行っています。教育旅行は、販売価格1人1,500円、最低価格3万円です。有料見学会も1グループ当たり3万円で、採算を取っていくと伺っています。

続きまして、鶴田ダムは、河川管理者のダム管理所と、さつま町、ツアー提供・案内ガイド調整を「ひっ翔べ！奥さつま探検隊」が中心になって行っています。

戦略策定では、個人客のツアーを有料化に移行させています。持続可能な事業基盤の構築として、河川空間のオープン化の指定を終え、休日の受入れ可能な体制を整備し第2・第4日曜日に受入れを行っております。オープン化に合わせダム見学案内のガイドを募集し、案内ガイドによる運用を開始しており近くの観光施設である曾木の滝、曾木発電所遺構などを組み合わせた見学プランを検討しております。

ターゲットを個人一般客に絞った見学コンテンツを有料にて提供しており、現在、鶴田ダム管理所が行っていますが、将来的にはNPO法人の探検隊が主体的に見学会の受付や販売、ガイドング等の運営を担っていくということでございます。

このNPO法人はガイドングでも連携していますが、今後はNPO法人が中心となり、管理所や市町と連携していくための移管を今後進めていく予定です。

10ページ目にこれまでの成果として、一般の方は有料見学、学校関係は無料見学という形で、見学会の案内を一つのウェブサイトにて案内しております。

11ページ目、最後には新日下川放水路です。日高村が占用主体となり、河川空間のオープン化を行っていく予定です。

事業基盤の構築として、コンテンツの予約の窓口を観光協会が中心に行うことを検討しています。

提供商品の造成としては、放水路の見学にとどまらない新たな高付加価値コンテンツとして、トンネルクルーズの体験検討や、仁淀川流域の魅力や日高村の水害の歴史を発信・体感する場としての映像制作を実施する予定でございます。また、ロゴなども新規作成しております。

12ページ目は、近隣の教育旅行のほかに個人一般客をターゲットとしてクルーズ、放水路内を探検するコンテンツの開発を進めています。まだオープン化自体は手続を進めているところですが、占用主体の日高村と事務所が連携しながら、事業主体である日高村観光協会が販売を受付するような体制を取り、持続可能な推進体制と事業収益の獲得を目指していくとのことです。

13ページ目は、教育旅行のパンフレットは既に整備済みで、ガイドマニュアルについても、今後トンネルクルーズを行っていく上での充実が必要な部分はありますが、一定程度整備済みとなります。

このトンネルクルーズは、放水路の奥の水がたまっている場所でクルーズするもので、高付加価値且つ高単価コンテンツの造成を目指しているとのことです。

14ページ目はモデル地区における社会実験の総括です。天ヶ瀬ダム・鶴田ダムは、戦略策定、提供商品の造成、対外的な発信、地域が主体となった観光コンテンツの造成が達成されています。

新日下川放水路については、検討中の部分がありますが、観光協会が主体となり有料コンテンツも提供しており、一般向けのコンテンツも自立的に検討が進められております。

各コンテンツともに自走できるような体制が整ってきているおり、今回、卒業ということと考えています。

【清水座長】 既存の3つのモデル地区の状況を総括いただきましたが、御質問、御意見、確認事項等ございますか。

【河野委員】 11 ページに少し不正確な部分がありましたので修正をお願いします。
新日下川放水路、下の表の③提供商品の造成のポツ3つ目の「仁淀川流域の魅力や日高村
の水害の歴史を発信・体感する場として、映像制作を実施」とありますが、今年度制作し
ている映像は、主に大人向けの体験コンテンツ参加者を対象として、体験前に知識レベル
を合わせて意義を理解頂くために現地で見せるための導入動画です。プロモーション及び
予約受付用のウェブサイトは次年度以降に整備していくこととなりますが、例えばこれら
の広報ツールに活用するような、興味を喚起して来てもらうための動画ではないことを補
足します。

【篠原委員】 私は、鹿児島県の鶴田ダムを担当しましたが、当初は有料化を全然想像
できないような状況でしたが、九州の山奥で、一生懸命九州地整の皆様と実行して参りま
した。今ではウェブサイトができ、予約が自動でできるようになり、有料で見学を実施し
ております。また土日も見学が展開できる体制を整えました。

ハッ場ダム等に比べ、周辺の観光的な施設が少ないですが、このモデルはどんな山の中
でもしっかりと条件を整えて実行していけばできるという証明になったと思います。

一方、今後人事異動のシーズンを迎え、蓄積されたノウハウが、現場や九州地整に引き
継がれるか心配しています。

また、現場のモチベーションにつながる評価ができておりません。後の議論にも出ると
聞いていますが、頑張った地区に賞状が出る等の評価されるような仕組みが必要だと思
います。

【公共事業企画調整課長】 例えば地元のNPOと一体となって行った活動について、
手づくり郷土賞のように取組に対して審査をし、表彰する取組がありますので、このよ
うな制度と有機的に組み合わせられると良いと思います。地域の方が喜び、バックアップ
している整備局も一緒に発表会に来て共有出来る場として活用していければと思います。

【清水座長】 確かに表彰は良いですね。あとは土木学会等でも賞を検討するなどもあ
ると思います。ハード面ばかりではなく、どう運用したか、どう理解を深めたかという点
も、表彰等の観点としてはあるかもしれないですね。

【河野委員】 日下川ですが、4月の下旬に新放水路の完成記念式典が開催されます。
放水路自体の運用開始が今年度の6月1日で、これまで工事中の場所で試験的なイベント
しかできなかったため、恒常的なツアーの検討、調整、交渉が進められませんでした、

それ以降、かなり速く検討が進んできたと思います。これまでは当初計画にある教育旅行の受入が中心で、これについては継続する前提です。とはいえ、教育旅行に絞ることによる収益性おの低さや、むしろ大人にちゃんと知って・愉しんでほしいという地域側の意向により、この大規模なインフラを、娯楽性が高く高単価なオリジナルコンテンツ造成に結びようという議論を進めてきております。私も1月のクルーズ実験に参加しましたが、大人向けのエンターテインメントコンテンツになる素地はあります。

現在、コンテンツ造成の実現性検証のために実験をしている放水路内クルーズは、放水路出口が隣町となり出発地点から距離があるため、観光客や資機材のオペレーションに係る新たな課題に直面しています。高単価に見合う価値があるコンテンツにするためには、その分オペレーションの工夫や配慮、安全管理の徹底が必要です。販売に向けて、所要時間、動線、安全管理、資機材の整備などの条件について検討を続けています。転覆実験や無線実験、有毒ガスの検証など、手間を掛けて実験を繰り返していることは非常に有用です。放水路の供用開始からまだ1年経っていないため、中の水が通年でどういう状況になるかなどのデータが必要で、安全管理を徹底しつつ、データを取りながら進めていくことになると思います。

モデル地区は卒業しますが、来年度に放水路が河川に指定されるため、河川のオープン化に係る手続きもこれからです。令和8年度の完成を目指して呑口周辺の公園化やビクターセンター等の整備が計画されており、ハード整備までのタイムラグが生じます。令和8年度までどういうステップと時間軸でハードとソフトを構築していけるかと観点は、ほかのモデル地区とはまた違うタイプです。高単価でアクティビティー性が高いコンテンツ造成を狙っている点で、いい事例になると思います。

【阿部委員】 日高村の基幹産業は何ですか。林業ですか？

【河野委員】 一番はトマトで、農業がベースです。

【阿部委員】 水害だけに着目してインフラツーリズムにするというよりも、なぜ水害が頻発する土地に暮らし続けてきたのか、実は、水害を上回るような、そこに暮らすことの利点があるのではないかと、そうした観点からインフラツーリズムを組み立ててもよいのではないかとおっしゃいました。新しくできた河川のインフラと、既存の産業や暮らしとのかかわりなどに展開していくと、村のシビックプライドがより高まるのではないかと、感想ですがおっしゃいました。

【篠原委員】 一番大事なことはインフラツーリズムの原点です。防災を観光という視点で伝えることが目的の一つですが、地域につながるストーリーがないと立ち位置が分からなくなります。その地域の成り立ちとして、災害の歴史、災害に対応する人の営みを経て、今の町が出来たみたいな物語を見える化することが必要だと思います。

今、トマトのお話が出ましたが、トマトのブランド化を進めているのであれば、背景に美味しく取れるトマトの土壌があり、その原点をインフラツーリズムで見せるというような大きなストーリーが必要だと思います。

【阿部委員】 天ヶ瀬ダムですが、先日、宇治茶を世界遺産にしようという集まりに参加しました。観光の方もおりましたが、天ヶ瀬ダムの話が出てきませんでした。一方で、天ヶ瀬ダムに行くと、インバウンドの方がわざわざレンタカーや徒歩で、見学に来ており、目的を聞いたら、ダムを見に来ましたと仰っていました。最初は教育旅行かもしれないですが、宇治茶や、平等院など集客のコンテンツがあり、市街地からも非常に近い希少なダムですので、さらに展開が期待できそうだなと思いました。

【河野委員】 当初からお茶との組合せ等は考えており、モニターツアーを試行する際にお茶体験をセットとしたり、食体験としての仏教の考え方と組み合わせたりというような、教育側面でインフラ以外のテーマを組み合わせで検討しております。

【清水座長】 卒業の観点で見たときに、日下川はまだできていない点がありますが、基本的な体制はできているということで、卒業で良いでしょうか。

ただ卒業後のモデル地区の状況は気になります。卒業したとはいえ、継続的に状況をモニタリングしていただきたいと思います。3地区は卒業でもよいと個人的に思っていますが、社会実験終了でよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【アセットマネジメント企画調整官】 引き続き、モニタリング、フォローアップを行っていききたいと思います。

【清水座長】 次に、今年度、新たモデル地域の説明をよろしくお願いいたします。

【アセットマネジメント企画調整官】 令和5年度の地区としては、青い池（美瑛川ブロック堰堤）と十勝岳火山砂防情報センター、大源太川第1号砂防堰堤、亀の瀬地すべり対策です。

青い池ですが、11月にキックオフミーティングなど、現地で会議などを重ね、今はガイディングシナリオを作成し、既存のジオツーリズムに加え、インフラも含めたインフラ・ジオツーリズムという新たなコンテンツの検討を進めています。

事業基盤としては、十勝岳ジオパーク推進協議会を核として、美瑛町、上富良野で、連携体制の構築を目指しております。美瑛町観光協会と連携した受入れ体制構築も検討しています。

提供商品の造成では、個人向け、団体向けのコンテンツ造成を検討しております。対外的な発信は、十勝岳火山砂防情報センターの近く温泉街からセンターへ誘導するための看板設置も検討しております。ターゲットと戦略としましては、日帰り観光客のほか、宿泊観光客をターゲットに見据えながらガイドの高度化、滞在時間に応じたコンテンツ案の策定、移動手段に依存しないプラン設定を検討しております。

体制づくりは、現場の旭川開発建設部と十勝岳ジオパーク推進協議会が連携して、美瑛町、上富良野町などを含めながら検討しています。

続きまして、大源太川第1号砂防堰堤は湯沢砂防事務所が施設管理者で、雪国観光圏と湯沢町、湯沢町観光まちづくり機構が連携した取組の検討を進めております。

事業基盤の構築ですが、湯沢町観光まちづくり機構と連携し、土日を含めた受入れ体制を検討しております。

提供商品の造成として検討段階ですが、過去のツアーやモニターツアー実績を踏まえた設計を検討しており、他の事例やスポットなど異業種と連携した体験価値の磨き上げなど、連携したツアーの検討をしています。対外的な発信は、新たな情報発信方策としてコンテンツのPR資料等の作成を検討しています。

ターゲットについては、教育旅行、キャンプ客、またインフラファンを呼び込むということも検討しております。他のインフラ施設と連携しコアなインフラファンにも訴求を検討しており、また地域連携、地域周遊についても重視することで、教育、一般客にも展開を考えております。そこで雪国観光圏が中心となった体制づくりについて検討しております。

亀の瀬地すべり対策は大和川河川事務所と、2府県の2市町にまたがっておりますが、いずれも日本遺産「龍田古道・亀の瀬」推進協議会の関係地域となります。地元のマイクロツーリズム推進協議会との連携を図り、コンテンツの実施主体となるように調整・検討

を進めています。

戦略策定は、関西圏の一般、教育等の広いターゲットを中心にしつつ、地域関係者によるワークショップを開催し、インフラツーリズムを通した稼げる地域づくりや観光消費額の向上に向けての滞在時間の延長、消費を促す仕組みを検討しています。

事業基盤の構築は、民間事業者が担う方向で体制を構築、また亀の瀬地すべり資料室の更新をしています。

提供商品の造成は、特に地域の周遊性を高めた高付加価値コンテンツの造成を検討しております。インバウンドも検討するとのことでした。

ターゲットを関西圏とし、地域周遊による、地域の消費額増加、長時間滞在となるように検討しております。

【清水座長】 今の御説明について御質問、御意見等ございますか。

【篠原委員】 私は美瑛の青い池を担当しています。現地初回打合せの11月から3か月くらい経過しました。美瑛町が今までの観光を脱却しなくてはならないという、大きな転換期にございました。美瑛は、オーバーツーリズムの問題が生じており、農地への立入りを禁じる町の条例や、今後は入場料を取り開放していくことをお考えで、稼ぐ観光への転機となっていました。

ベースは青い池ですが、青い池は上流の砂防施設により形成されており、これらを合わせてインフラツーリズムにつなげたいというのが北海道開発局のイメージでした。

現地訪問させていただきましたが、十勝岳火山砂防情報センターは、古い施設であり、何を伝えたい施設なのか明確ではありませんでした。情報センターを今回のインフラツーリズムのメインにしたいということですが、防災を伝えたいことは何となく分かるものの、物語が何もありませんでした。もともと十勝岳の火山防災としてこの施設が建設されております。美しい美瑛の大地は十勝岳の噴火で蓄積された軽石が堆積し、それを地域が一生懸命土壌を入れ替え、きれいな丘となっているということでした。

この十勝岳は30年に1回ぐらいの頻度で噴火しますが、今もう36年目になります。もう1度防災を考え、インフラツーリズムだけでなく、ジオツーリズムのストーリーを加え、インフラ・ジオツーリズムとしてコンテンツ造成することになりました。

これまで開発局が伝えたい防災の内容を含むガイドマニュアルがなかったため、防災と自然の成り立ちをつなげるガイドマニュアルを作成しております。

また、このインフラ・ジオツーリズムの実現に向けて、観光庁の地域観光新発見事業に申請をするために動き出しております。選定されると砂防情報センターも大きくストーリーのある御案内ができるようになると思います。

お手元のパンフレットの裏側ですが、地域のDMOによるジャンボハイヤーや中型バスまでいろいろなパターンを組み、インフラ・ジオツーリズムを体験いただくような仕組みを作っております。着実に民間を巻き込んで動き出しております。

本件は美瑛町だけでなく富良野地区全体との連携になりますし、DMOのご担当である地域振興課長からもコメントいただきたいと思います。

【観光地域振興課長】 美瑛は御存知のとおり、オーバーツーリズムの一つの代表格になっており、それをいかに分散するかということが求められている状況です。方向性は観光庁とも一緒であると思いながら聞いておりました。新発見事業もぜひ活用いただければと思います。

分散という観点で言えば、時間の分散と場所の分散です。場所の分散という意味で、このインフラツーリズムは非常によいと思います。

【清水座長】 ほかはいかがですか。

【河野委員】 亀の瀬は、令和2年度に日本遺産に認定されており、日本遺産「龍田古道・亀の瀬」推進協議会の構成員が、大阪府柏原市、奈良県三郷町と、大和川河川事務所です。日本遺産のストーリーの中核に「地すべり」を位置づけているため、日本遺産観光や情報発信を推進していく中で、地すべり対策にフォーカスを当てたコンテンツをインフラツーリズムとしてスピンアウトさせたという点が特徴です。

既存の日本遺産の取組と連動を図りつつ、体制を一本化していくというのが今年度が一番重要視されたポイントでした。これまでは河川事務所が独自でトンネルの見学会等は無償で実施していたところ、日本遺産協議会では別途、全体のガイド関連業務を推進していました。今後は、河川事務所による案内はやむを得ない場合に限り、原則として日本遺産ガイドに案内を一本化する方向で進めております。また、この3月に地すべり資料室がリニューアルオープンします。インフラツーリズムの起点として、従来の資料館にあった地すべりに関する展示説明施設としてだけではなく、ガイドの常駐や周辺の観光エリアの案内、物販デスクなどを機能させようと調整しています。河川事務所と、地域の民間団体である「マイクロツーリズム推進協議会」との間で連携協定を締結する準備が進んでいます

が、この団体が実施主体となってインフラツーリズムや大和川を使ったアクティビティをセットにしながら収益化を目指す体制構築を図っているところです。

日本遺産があつてのインフラツーリズムでもあるため、日本遺産のウェブサイトインフラツーリズムの情報も載せ、そこから一本化された受付システムにアクセスできるようにすることはもちろん、インフラツーリズムや河川事務所のウェブサイトから日本遺産にアクセスできるような情報動線の具体化についてもこれから協議されます。スポット単体の見学環境やコンテンツの魅力をブラッシュアップすることも非常に重要ですが、まずは日本遺産とインフラツーリズムの取組に重複と漏れがないように体制と業務分掌を検討し、民間がきっちり自主事業で運営できるような仕組みの検討を最優先で行っております。

資料室は、この亀の瀬の地滑りエリアの西側にありますが、過去の地すべりで鉄道が寸断された際には、当時の乗客が歩いて亀の瀬の地滑り地を超えて地すべり地の東側まで移動し、鉄道を乗り換えました。その時の臨時の駅があった場所に、日本遺産の情報発信を核としたビジターセンターを整備する計画が別途進んでいます。西の駅となる資料室と、東の駅との間の徒歩ルートがなかったところ、当時の乗客が歩いたけもの道を河川事務所が再整備し20分程度で歩ける道ができたことも、非常に大きなポイントです。西と東に、インフラと日本遺産を楽しめるそれぞれの拠点ができ、その間を人が行き来し広域で地域を巡って頂けるような、その次の取組を考えております。

外国人に関しては、近隣の信貴山は一定程度のポテンシャルがあり、中長期的に考えていくテーマにはなりますが、日本人向けのハード・ソフト整備が途上な中においては、優先度として一段階後での検討となります。

【清水座長】 大源太川ですが、現地は非常に雪深く、年7か月ぐらいしか使えないような状況で、その半年強でどうするかという点が最大のチャレンジだと思っています。

私は、まずは現地の議論を待っている状態で、その意図は砂防事務所と町だけの世界観だと狭く、誘客や収益につながらないだろうと思っています。一方で、雪国観光圏を中心とした民間は、すごく強いストーリーに基づいたコンテンツをつくれるので、この2つを掛け合わせたときの科学反応に期待しています。

鳴子ダムと同様に、インフラ単体では難しいときに周りとうりどうやって連携するかという点において、雪国観光圏の持っているノウハウを活かすことに期待しております。また、

このインフラがないと湯沢町は発展してなかったとのことで、非常に大事な地域のストーリーの中で核となるインフラです。

雪深いからこそ生活の知恵があり文化が生まれた地域であり、洪水等で町の近代化の妨げとなっていました。砂防施設ができたことで、上越線ができて湯沢の町が発展して、ゆくゆくはスキーで発展するというストーリーは確認しましたので、雪国観光圏に検討をお願いして、その回答を待っている状態です。

工事中の管理通路をコンテンツとして使いますが、その鍵の管理など、民間で行うための問題がありました。それに対して鳴子の事例や、同じような民間が鍵を管理する事例として外郭放水路を紹介して、研究していただいております。以上が大源太川の状況となります。

一通り伺いましたが、阿部先生、何かございますか。

【阿部委員】 今回、砂防関連の施設が多いのですが、砂防に携わる方々は非常に結束力が強く、「やるぞ」となったら一気に物事が進む印象があります。また、砂防は、砂防堰堤という「点」で抑えるのではなく、流域という「面」で処理しますので、1か所メインとなる施設があったとしても、関連施設が非常に多いので、面としての展開も期待できます。地質だとか地形を読まなければいけませんのでジオパーク的なつながりも出てくると思います。

以前、広島の砂防施設を案内していただいたのですが、物の見方が、土質がどうかや地形がどうかなど、いわば砂防的な見方を教わり、たいへん興味を持ちました。そうした物も見方も伝えられると、よりインフラへの理解も深まると思います。

今回のモデル地区の検討を通して、いわば「砂防モデル」のような取り組み方が見えてくるとよいと思います。

【篠原委員】 砂防というと、一般から知られていないイメージがあります。ダムや橋は日頃接していますけれども、例えば日光の足尾遺構ですね。あの周辺は非常に景色的にも景観的にも特徴があり昔から興味はあったのですが、観光資源としてのつながりが見えなかったと思います。今、阿部先生のお話にあったように、砂防モデルという部分で観光として新しく展開できると面白そうです。

【清水座長】 そうですね。ネットワークになるといいですか、地形や土壌にあわせ、現地ですることによりかなり工夫があると思います。事例が増えたときに、類似のパターン

として横展開できそうだと思います。

【公共事業企画調整課長】 砂防事業は大きく分けて砂防と地すべりがあり、亀の瀬は地すべり事業です。砂防事業の中にも火山砂防と水系砂防があり、十勝岳は火山砂防であり、大源太は水系砂防で、砂防の各種事業を今回の3地区でほぼカバーしており、今回の3つのモデル地区から横展開できるのではないかと考えています。

【河野委員】 特に水系砂防は見学に行きたくても山深くアプローチできないところが多いので、一般の方が足を踏み入れて見学できる箇所、その整備をしている箇所はレアですね。土地の条件に沿い、設計や工事を工夫しながら自然に対応していくストーリーは、砂防が一番よく現れると思います。災害と戦い、食い止めようとする人の努力や工夫、事業の時間的なスケールなどのストーリーは、ほかのインフラと比べても訴えかけるものが多いという印象です。

【清水座長】 次に進めさせていただきます。インフラツーリズムのさらなる拡大に向けてというところで、御説明よろしく申し上げます。

【アセットマネジメント企画調整官】 本懇談会の目的はインフラを観光資源として活用するインフラツーリズムの価値を高めて、地域や民間と連携して展開していく方策を議論するといものです。その中で平成31年3月に、2020年に向けてということで、インフラツーリズム魅力倍増プロジェクトと題しまして、モデル地域での社会実験の実施や、国内外に向けた魅力ある広報などを展開してきたところです。現在、全国7ブロック、10地区で旅行商品の造成を進めてきました。また、インフラツーリズムの拡大の手引きを改訂版も含めて作成させていただきました。ポータルサイトの構成も見直しているところです。

これまでのモデル地区の取組や、社会情勢の変化もありますので、具体化やさらなる見直しも含めて、いろいろ御意見いただければと思っております。

論点1としては、このモデル地区の取組をさらに広げて、さらにインフラツーリズムを拡大させていくための方策です。

施設としては砂防、橋、ダム、放水路をモデル地区として支援しており、地域も北陸が新たに加わり各地区で今後の来訪者の増大が期待される場所ですが、まだ全てカバーしてはございません。新しいインフラ分野、地域、テーマがあって、様々な課題がある中で、引き続きモデルケースが必要と考えてございます。

国だけではなく、都道府県も含めて、全国でインフラツーリズムを拡大させるための方策を進める必要があると感じております。模範的で優れたインフラツーリズムを水平展開できないか考えております。モデル地区を1個1個立ち上げても、展開には時間がかかる中で、水平展開の方策を検討していきたいと考えております。

水平展開にあたりインフラツーリズムに取り組む意義をまずは関係者に理解していただくということが重要です。

一つは、観光資源となり得るポテンシャルを有するインフラが、インフラツーリズムに取り組むことで地域への来訪者を促すということを地域にとって理解いただくこと。インフラ管理者にとっては土日も含めてインフラ見学の機会を設定できるということ。さらには防災も含めたインフラの理解促進を図ることができる上で、さらに地域活性化の面でも寄与できるということ。国民にとってはいろいろな関心がある中で、施設や取組にバリエーションがあることで、それぞれの関心に沿ったインフラツーリズムを選べるのがメリットになるのではないかと考えています。様々な管理者が行っているインフラツーリズムの中から模範的で魅力があり、体験いただきたいインフラツーリズムをピックアップし、場合によっては表彰など行い、好事例をうまく広報周知することで、インフラ管理者と地域が連携しながら自発的に取組を促すことができるのではないかと考えています。

論点2です。モデル地区として卒業に5年かかった箇所もございました。その中でツアーやガイドを担うための受入れ体制構築に時間を要した事例もございますし、コンテンツの造成が円滑に進まなかったところもございました。また、施設単独の有料コンテンツだけではなく、教育旅行向けの有料コンテンツや、地域と観光資源と連携した色々なパターンが、様々なコンテンツを造成することにつながったと考えています。この現状を維持できるか、または増やしていけるか、持続性も着眼点としてあると考えております。

こうしたモデル地域の取組について、さらなる拡大、横の広がりや充実、深掘りという点で課題や今後インフラ管理者が取り組むべき事項について特に御意見いただきたいと考えております。

【清水座長】 事務局から出していただいた2つの論点を中心に議論できればと思います。

【篠原委員】 手引きも更新され、国土交通大学のインフラツーリズム研修もあります。手引きができ、講習が行われていても現場でどうしたらいいのかという声がありま

す。受講生に意識はあるとしても、上司にお話ししても具体的にどうしたらよいかわからず、止まってしまうと毎年伺っています。

また機運を再度高めていかないといけないと思いますが、原局の道路局や水局からも評価がないとなかなか頑張ることが出来ない。モデル地区に応募してきてはいますが、モチベーションがついてきているかも大事です。

原局でも、インフラツーリズムの取組があることを認識していただいていないこともあります。国交省内で推進していく機運をつくること、そして観光庁としても新しい観光資源になり得るものなので、体制を整えていく事がこの委員会の提言になると思います。

【河野委員】 今の篠原先生のご発言の通り、インフラツーリズムの取組が重要という認識を国交省全体で持ち、各地整や自治体にその意義がきちんと伝わるのが非常に重要だと思います。手引きの公開だけではその「熱意」の部分まで伝えることができず、「伝える」という面においては手薄な印象です。例えばインフラツーリズムの全国的なシンポジウムをリアル、ハイブリッドで開催し、省庁のトップクラスの方がご自身の言葉で意義を伝える。そのことだけでもかなり強いメッセージ性が打ち出せます。

インフラツーリズムの意義を理解し、共感して頂ける関係者が地域に増えれば、関係者間での情報共有や、ポータルサイトでの情報発信・情報収集という取組がより生きてくることも考えられます。まず国交省として、これがとても重要であるというメッセージを出すためのインパクトのある打ち手と、着実な仕組みの構築の両面を考えるよいタイミングと思っています。

【篠原委員】 今まで成功してきた箇所は、現場の方々に熱量がありました。鍵を管理する仕組みや、鉄塔の上まで登らせることはリスクがあるのですが、現場側に整備局の応援も伝わり、現場の責任となっても情熱があるので進んできています。

【河野委員】 先日、県単位でインフラツーリズムを推進していく都道府県の会議にゲストで出席しました。参加者は自治体だけでなく、旅行系の企業や、コンテンツになり得るインフラを持っている企業が含まれました。民間からはもっとやりたい！という意思や熱意が強く出ていましたが、自治体と地整で受け止めきれないような感じました。

さきほどのシンポジウムのようなイベントでは、意識の高い民間も聴講対象者として含むことが重要だと思います。地整の方に熱意を持ってもらうことが推進には不可欠とはいえ、インフラツーリズムが地整から自発的に生まれるとは限らない前提に立って進めてい

く必要があると思います。

モデル地区の横展開はもちろん重要ですが、一方で、我々の目に触れていない民間の取組が全国各地にあり、その知見の数は、これまでのモデル地区の何倍も多いはずです。

そのような知見の共有とコミュニケーションができる関係者のプラットフォームが必要です。留意すべきは、プラットフォーム作成後に、会員同士で自由に会話してくださいで動かないということ。最初はどうか会話をしていいかわからない、手引きを読んでも自分の悩み事に直接的な回答が書いてあるわけではない中で、悩みにあわせて必要な人につないでくれるようなコーディネーターが必要であると考えています。

あるいはインフラツーリズムのイベントの参加者募集のような発信をして、みんなが研修のように互いに見学会等に行き来をして、危機管理やガイド、コンテンツをほかの地域から学ぶ機会を作っていくなどのリアルな活動と連携をさせていくことが非常に効果的と考えます。

【篠原委員】 我々を含め、本気で回そうというプラットフォームをつくった上で御提案のことをやらないと回っていかないと思います。

現場がインフラツーリズムに取り組む意義を原局からも発信していただかないと盛り上がり、形骸的になってしまいます。先ほど鶴田ダムの話もしましたが、ノウハウは人が替わると切れてしまっているのが今まででした。立野ダムも非常にいい素材ですが、なかなかうまくつながらない。例えば成功した地整の方でも、チームをつくっていただいて、役職や立場を超えて組織化され、みんなで盛り上げようというような機運を高めていくようなことが大事だと思います。

国交省の中でも認識を統一していただく必要があるのだろうと思います。

【阿部委員】 やる気のある人や施設、組織がやりやすくなるような取組と、あまり意識のないところに取り組んでもらうような取組で、方向性が異なると思います。前者は、モデル地区で伸ばすことでよいと思うのですが、まだやる気が芽生えてないところをどうするか議論が必要かと思います。

その際、もう少し都市もしくは都市計画分野と連携できないかと思っています。都市行政の視点で見ると、モデル地区と言った際には、対象地区をある程度明確にして、たとえば地図上に明示して、その地区内で面的に取組を進めます。一方、インフラツーリズムのモデル地区は、地区と言うよりも、中心的な存在となるインフラとその周辺の自治体や関

係者が関わる取組の枠組みをさしているように思います。それはそれでよいと思いますが、一方で、まだやる気が芽生えていないところに対しては、例えばインフラツーリズム推進地区などとして、地区指定されると、地区内の取組に様々なインセンティブがあるような枠組みができれば、特に都市行政においては、インフラツーリズムを始めるきっかけになると思います。熱量のないところには仕掛けがないと、一步を踏み出すのが少し難しいのではないかと思います。

【篠原委員】 思いつきですが、3.11や、南海トラフだとか房総半島のスロースリップの話がどんどん出てきております。都市防災という観点でいくといろいろな施設があると思いますが、都市の防災をつなげて楽しく学べるようなものが何か面ではないように思います。外郭放水路も洪水地域のエリアが守られていますが、もっと大きな意味でこの防災を考えることを観光資源にできないかなと思いました。

【阿部委員】 インフラツーリズムは、広い意味でまちづくりには取り組んでいるのですが、都市計画などの制度とリンクしていないという印象です。持続可能にするには、基礎自治体との関わりが必要ですし、制度面や体制面も含めて、どういう受皿で何に取り組むのか、今後の議論になりえると思います。

【篠原委員】 点でなく全体を見据えるような仕組みが必要ということですね。

【阿部委員】 まさにインフラツーリズム推進地区のような形で指定もしくは認定をして、指定や認定を受けると、地区内の取組に対して人的あるいは財政的な支援が受けられるなど、インセンティブがあると良いと思います。

【清水座長】 町なかの歴史的な堤防などもインフラですが、都市内にあるものだと話としては絡みやすいですが、都市区域から離れたところにあるインフラがほとんどです。そういうところで制度的にどうやるかという議論は面白いかもしれないと思います。

今、先生方のお話は体制の話と制度の話に集約されるのかなと思って聞いていました。体制はいろんな案件で地域の方と関わりますが、インフラツーリズムで言うと地整や事務所があり、さらに民間とがあり、これらをどのようにシナジーを持たせるかが本質的な問題だと思います。

このときに、この間に立つコーディネーターのような人が、東京から出向しているのが実態です。そうすると、手数が限られる。このような立場の人を増やしていかないといけないと思っています。この体制下で、この部分が今まで議論されてないと思っておりまし

た。地域に根付いたコンサルや大学の先生を早くこの体制に巻き込んでいき、地整を中心としてネットワークでやればいきなり人の異動によって切れることはないと思っています。

【篠原委員】 観光庁の課題も予算終了後、地域で独立する建て付けになっていますが、なかなか機能しない地域もあります。今回のモデル地区でいろいろ成功事例が出てきていますが、これをきちんと育てていく必要があります。地整の中で実績がある方が特別に研修を開きながら、認定するような役割を持っていただくとか、人材を育成しながら地域に関わり続けていただく必要があると思います。

【公共事業企画調整課長】 都道府県などの取組もあるので、直轄だけではなくて広げようという話を最初にさせていただきました。

そういった中で考えていくと、今、清水先生からも体制と制度というお話がありましたけど、もう1個別の視点として上からやるか、下から積み上げるかという話も議論の中にあるように思います。上からやるということでは国がモデル地区として取組を行い、積み上がってきましたが、卒業したら終わりでは困ります。

一方で、国以外にもいい取組もあり、何かそういったものを例えば、まとめて選定する仕組みづくりも検討できる。毎年、棚田100選のように選定し、その上で何年かに1回ちゃんと取組が進んでいるか確認し、取組が進んでないところは新しいところと入れ替えや、あるいは増やしていてもいいかもしれません。

まず上からの取組をいうと、道路局、水局という原局も大事で、施設を管理することは責任があるので土日はやりたくないとか、事故を起こしてはならないと思いますので、そういったところをどう打破していくかという、本省からルールを少し変えてもらうとか、緩めてもらうことも大事で、その点も表彰があれば少しは変わるかもしれません。

もうひとつ、職員は異動があり、異動で関係が切れる話は否定できません。地元に残っている人としっかりつながっていくために、内閣府さんの取組の伝道師さんとかと連携して、地元の人とうまく連携できるような仕組みなど工夫する必要があると伺って感じました。

【篠原委員】 頑張ったところは評価し、さらに大臣からの表彰があったらみんなモチベーションにつながると思います。

【清水座長】 役所の方が何を表彰されるとよいかを考える必要がありますね。

【公共事業企画調整課長】 職員を表彰するのは難しいので、よい取組を評価したい。例えば今回のモデル地区が、仮にインフラツーリズム30選等に選ばれるなどとするところが、モデル地区に関わった経験が自分の仕事として認められることに繋がるということも考えられます。

【河野委員】 地整の方には効果が高いと思いますが、一方で民間の人には響きにくい内容でもあります。表彰はうれしいけれど、民間の会社が取り組むためには資金が必要ですし、「売れる」がゴールでないと取組の意義がない。民間の方でも、取組にコミットするために上長の許可が必要になりますが、そこへの影響力は若干弱いと思われま

【篠原委員】 表彰を制度設計する際は、民間も入ってビジネスモデルがつくれたところが表彰されるようにすべきだと思います。民間が入ってこないとインフラツーリズムは回らないので。

【公共事業企画調整課長】 そうですね。おっしゃる通りです。施設そのものを評価するのではなく、インフラツーリズムという取組を評価することが重要であり、コンテンツが提供できていることが対象となり、ただ観光地である、ということだけでは違うと思います。

【篠原委員】 何かイベントを行っているだけでは、駄目だということですね。

【公共事業企画調整課長】 そのため、5年に1回ぐらいか10年に1回か、3年に1回か分かりませんが、見直しも考える必要があると思います。民間会社が表彰されたとしても、5年後になったらその会社がなくなっていました等もありますので、その後のフォローを含めて考えていくことが大事だと思います。

【河野委員】 そういう制度をつくれたとしたら、これまでのモデル地区とはまた別の広域の県単位の取組というものも応募できるなど、いろいろと対象としての取組の範囲が広がる可能性がありますね。

【公共事業企画調整課長】 その点は引き続き議論していただければありがたいと思います。

【篠原委員】 国の中でもモデル地区を進めると同時に、幅を広げられるような制度も進めたいということでしょうか。

【公共事業企画調整課長】 私が県にいたときにもすごくいい素材はありましたが、こういうモデル地区も知らなかったですし、そのように考えております。

【観光地域振興課長】 観光庁では、いかに消費額を伸ばすか常に考えておりますが、今日、インバウンドの話があまりなかったという印象です。どんどんインバウンドは増加していくので、どうやってインバウンドを誘客するかという視点もあります。インバウンド誘客には、多言語化やガイドさんなど受入環境をどう整備していくかの検討も必要で、これまでのインフラツーリズムの議論とは違うのかもしれませんが、そういう視点を考えていくと、成果が出やすいのかなと思います。

特に観光庁は地方への誘客を一生懸命進めており、多くのインフラは地方にあり、ダムや砂防施設など、地方誘客の一つの有効なツール、コンテンツとして活用できると思います。今回、地域観光新発見事業もありますし、ほかにもたくさんの補助金制度があり、内容がきちんとしていけば選定されやすいので、地整の方も地元のDMOや観光協会と協力して提案していただければ、お金の問題はそれほど厳しくはないと思います。

【清水座長】 今日は重要な意見が多数出たと思いますので、事務局で整理いただき、ご検討いただければと思います。

今後の予定と新たなモデル地区の選定について御説明をよろしくお願いします。

【アセットマネジメント企画調整官】 今回、モデル地区を新たに立ち上げたいと思っています。各地整からモデル地区の候補を挙げていただきました。今回選定に当たっての視点は、多様な分野のインフラ施設や挑戦的な取組から選定したいことと、これまでのモデル地区がない地方を選定していきたいと考えております。候補は5つございます。

1つ目は、首都圏外郭放水路で、見学箇所の追加や既存見学箇所の充実のほか、地域周遊につなげてインバウンドをターゲットとしたインフラツーリズムのさらなる発展を模索したいとのことです。

2つ目は、バスタ新宿で、緻密な高速バスのオペレーション風景や日本唯一の線路上空に人工地盤を構築した施設自体を紹介や、バスのネットワークを活かした地方振興を模索したいとのことです。

3つ目は、温井ダムで、ダム見学とダム湖のアクティビティーを地域のガイドが特別感を演出した高付加価値の有料見学ツアーを模索したいとのことで、地域の観光資源とも連携も期待できるとのことです。

4つ目は、中筋川、横瀬川ダムで、既存イベントで有料イベントの開催の継続、公共交通機関と連携したサイクリングイベント、クライミング体験の組合せを継続しつつ、2ダ

ムを連携して発展させることを検討したいとのことです。

5つ目は、立野ダムで、ジオパーク推進協議会との連携、熊本地震災害・復興ツーリズムと組んだジオ・インフラツーリズムの提供、あとはジオガイドによる説明などのツアーの提供ということで連携を検討したいとのことです。

事務局でモデル地区としての評価を行いまして、1つ目から3つ目を選定したいと考えております。首都圏外郭放水路は、インバウンド対応も含めた検討で挑戦的な内容ですし、国の施設では先進事例ですが、インフラツーリズムとしてのさらなる展開を検討したいと考えております。バスタ新宿はこれまでにないインフラタイプで、モデル地区の実証実験の検討が妥当と考えております。温井ダムは中国地方に初のモデル地区ということで、地方整備局によるインフラツーリズムのノウハウ獲得のため支援が必要と考えております。残りの2事例については、地整内に既にモデル地区があり、施設としても新しいタイプではないと考えており、今回のモデル地区には選定しないということで考えております。

今後の予定ですが、令和6年度中に過年度の継続地区も含めて自走化に含めた検討、実証を行っていきたいと考えております。また、先ほど御意見いただいた優良認定制度、もしくは表彰などを引き続き検討していきたいと考えております。

【清水座長】 ただいまの御説明についていかがでしょうか。

【篠原委員】 首都圏外郭放水路、バスタ新宿、温井ダムについて、地元からの意欲が高く、採択していただけたらいいと思います。立野ダムと中筋川ダムは今回見送りたいという原案ですが、詳しくご説明をお願いします。

【アセットマネジメント企画調整官】 既に四国、九州にモデル地区があることと、ダムそのものも過去に事例があり、特徴の比較点がありませんため、今回選定しないと考えています。

【篠原委員】 モデル地区に選ばれなくても、例えば現地に有識者が必要に応じて助言できるなどの余地を残して、熱意が削がれないようにお願いします。

【アセットマネジメント企画調整官】 熱意がある中から推薦いただきましたので、フォローしていきたいと思っております。

【清水座長】 モデル地区事業を継続しますか。例えば鶴田は卒業しますし、日下川はまだ検討点がありますが卒業します。

【公共事業企画調整課長】 先ほど資料1のインフラツーリズムのさらなる拡大に向けてという論点の中で、これを継続しつつ、さらに進歩させていくとか、いろんな考え方があると思いますので、それも含め御議論いただければと思います。

【清水座長】 あとは何を検証するのかがというのが課題です。現状は、地整から推薦があり、体制ができているところで選ばざるを得ない実態があります。それぞれ今までのモデル地区との比較で何の違いを見るのかなども大事だとも思います。例えばバスタみたいなものは全く今までにないタイプで面白そうですし、首都圏外郭放水路は1回成立したものを、また新しく次にどうするかという点ですね。

【篠原委員】 リメイクですね。

【清水座長】 外郭放水路は既存の取組があり、すぐに知見を出してくれそうですし、温井ダムは、中国地方になかったので、バランスは取れていると思います。

【公共事業企画調整課長】 特に外郭放水路は、東京のインバウンドをいかに集客するかという点がすごく重要だと思います。先ほど観光地域振興課長からもインバウンド誘客の話がありましたが、外郭放水路は世界的に見ても集客できるものだと思います。

【篠原委員】 外国人の方からすると、自分の国の防災の規模とは違うと、非常に驚くと思います。日本の土木の誇りだと思います。

【河野委員】 インバウンドに関する先駆的な取組と、交通の問題もあり地域内周遊ができずスポット訪問になってしまっている点が解決できれば、ほかの地域の参考にもできると思います。

【清水座長】 そうですね。インバウンドは食と絡めやすいので、大源太川もそこを狙うように助言しています。単なる防災ではなくて、その機能によってで食の生産が安定していることや、質が向上しているなどのストーリーをつなげていけるとインバウンドに確実に刺さると思います。参考となる地域は今までの地域でも幾つかあると思います。

【河野委員】 首都圏外郭放水路は駐車場が不足しており、移動方法の解決が周遊にセットなので、その課題もいい検証点になると思います。

【清水座長】 事務局選定案でよろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

【清水座長】 今日はいろんな重要な観点の御意見をいただきましたので事務局でまとめていただいて、最終的に座長の私で確認させていただいて選定方針等を検討させていた

だきたいと思います。

【アセットマネジメント企画調整官】 清水座長、円滑に議事の進行をいただきましてありがとうございました。また、委員の皆様には長時間にわたる御議論ありがとうございました。

本日の議事録につきましては、後日事務局より各委員への確認を行った後、ホームページへ掲載させていただく予定でございます。

以上をもちまして、第13回インフラツーリズム有識者懇談会を閉会させていただきます。本日は活発な御議論ありがとうございました。

— 了 —